

「イスラエル建国史」

21 運動の中心地となったイギリス—その3

ユダヤ・中東研究家 滝川 義人



滝川 義人
Takigawa Yoshito

1937年長崎県生まれ。早稲田大学第一文学部卒業。イスラエル大使館チーフ・インフォメーション・オフィサー（1968～2004）として勤務。現在、MEMRI（メモリ、中東報道研究機関）日本代表。ユダヤ、中東研究者。主要著書：『ユダヤ解読のキーワード』（新潮社）、『ユダヤを知る事典』（東京堂出版）など多数。

シオニズム運動にとって、ロイド・ジョージ内閣の成立は一大転機となった。内閣の閣僚委員会や実務のトップである内閣官房に、シオニズム運動に理解のある有力者たちが名を連ねていたためである。特に、内閣官房のサー・マーク・サイクスは、シオニスト kongress 副議長であったロンドンの首席ラビ、モーゼス・ガスター師と意見をかわすようになったので、シオニズム運動を積極的に支持するようになる。そして、激論の末とまった「パレスチナをユダヤ民族のナショナルホームとする」ことを求めるユダヤ社会の最終提案に応えるかたちで、英政府の宣言が出されることになる。

国際社会公認の第一歩 —バルフォア宣言の発表

イギリス政府がバルフォア宣言の発表を閣議決定したのは、1917年10月31日である。その日は、ユダヤ人国家の建設に強硬に反対するモンタギュー国務相が、インドに出張して閣議には出ていなかった。サー・マーク・サイクスの案内で、



サー・マーク・サイクス

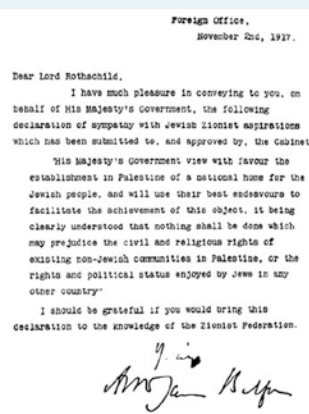
政治的地位を損なってはならぬという明確な理解のうえに、この目的の促進のため最大限努力する」。

閣議室から出てきたサイクスは、ワイツマンに向かって「男の子だ」と叫んだ。しかし、この文面を見たワイツマンは、素直にはうなずけなかった。パレスチナの前にinが入り、「ユダヤ民族のナショナルホーム」の前につけた定冠詞theがはずされて、aと入れ換えられていたからである。悪く解釈するとパレスチナの一角にひとつのホームをつくる意にとれる。

しかし、その領域がどうなるのか、ここで今考えても答は出ない。それよりも、超大国がナショナルホーム建設の支持と協力を公約した点が重要である。かつてヘルツェルは、国際社会と公法で保証されたユダヤ人国

閣議で決定した宣言は、バルフォア外相から英シオニスト連合のロード・ライオネル・ウォルター・ロスチャイルド名誉会長に宛てた書簡の形式をとり、次の文面であった。

まず前書きで「大英帝国政府を代表して、提出のあったユダヤ人シオニストの願いに関し、それに対する政府の共感を、閣議によって承認のうえ、宣言として伝える」と述べ、本文でその内容を次のように明記した。曰く、「大英帝国政府は、パレスチナにおけるユダヤ民族のナショナルホーム



バルフォア宣言

建設に賛成し、パレスチナにおける既存の非ユダヤ人社会の民権並びに宗教上の権利、及び他国においてユダヤ人が享受している諸権利並びに

家の再建を夢見たが、その初段階にようやくたどりついたのである。やるべきことはまだ沢山ある。何事も前向きに考えるワイツマンは、気を

とり直し、妻に電話をした後、師と仰ぐアハッド・ハ・アムのところへ報告に行った。

11月2日付で出された宣言は、11月9日付ジュイッシュクロニクル紙で公表された。ユダヤ人社会は歓喜して迎え、特にロシア・ポーランドのユダヤ人社会では非常な期待感が盛り上がり、戦時中であるにもかかわらず、移住熱が一気にたかまった。

アレンビーの新作戦開始

イギリス政府がバルフォア宣言を閣議決定した10月31日、パレスチナではトルコ駆逐の新しい作戦が開始された。作戦の指揮をとるのは、新任のエドモンド・ヘンリー・ハイマン・アレンビー大将である。アレンビーは第3軍司令官としてフランスのアラス会戦を指揮し、その戦功を認められて英エジプト遠征軍（英、ANZAC、インドの各部隊で編成）の司令官に選ばれたのである。アレンビー軍司令官は、3カ月間部隊の戦力増強をはかり、その間じっくりと新しい作戦を研究した。パレスチナのトルコ軍を指揮するのは、ドイツ軍から派遣され、1917年5月に着任したエリッヒ・フォン・ファルケンハイン大将であった。プロイセンの国防相を務め、西部戦線でベルダン戦を指揮した軍人である。

アレンビーは、トルコ軍の意表



アレンビー大将

をついて、ガザではなくベエルシェバを攻撃した。ここを攻めるためには、砂漠を通過しなければならない。水補給も困難である(この地域には井戸が17カ所しかなく、これを確保している限り、攻撃側は給水に苦しむ。いざという時井戸を破壊すれば、ベエルシェバを占領しても、そこで立往生する、とトルコ側は考えていた。歩兵同士が攻防戦を演じている間、オーストラリアの騎兵師団が散開しながら一気に突入し、ベエルシェバはその日のうちに陥落した。トルコ軍は井戸破壊のタイミングを測りかね、結局2カ所しか破壊できなかつた。



第一次世界大戦当時のベエルシェバ

ガザの陥落

2日後の11月2日、アレンビーはガザの南正面を攻撃し、ベエルシェバから、すなわち東南東の方向からも攻撃する態勢をとった。ファルケンハインは、はさみうちにあつて退路をたたれ、包圍殲滅されることを恐れ、ガザからの撤退を命じた。トルコ軍は後退戦を演じながら退却し、ガザは11月7日迄に掃討を終え、完全に占領された。これまで遠征軍は多大な損害をこうむりながら、2回も撃退されている。しかしアレンビーはほとんど損害らしい損害もださず、1週間足らずで占領したのであつた。



ファルケンハイン大将

エルサレムの占領

1917年11月17日、乾坤一擲の作戦が始まつた。エルサレム

攻略戦である。遠征軍は、テルアビブの北約7キロの海岸から東のジュディア丘陵の稜線へ至る北側面を守りながら、東のエルサレムへ向かつて攻めあがり、別働隊がヘブロンの方からエルサレムへ向かつて北上した。

12月8日、降りしきる雨のなか遠征軍の一部がエルサレム旧市を俯瞰する西の要地を占領した。敗北必至とみたトルコ軍守備部隊は、夜のうちに撤退した。そして12月9日。警察署長を伴つたエルサレムのフセイン・サリム・フセイニ市長一行が、白旗を掲げ、英軍の第一線へやつて来た。そして、応待した第180歩兵旅団長ワトソン准将に、正式の降伏文書を手渡した。

12月11日正午、エルサレム周辺の掃討を終えて、遠征軍司令官アレンビー大將は警護隊を従えて前線指揮所を出発し、聖地エルサレムに敬意を表してヤッフォ門から徒歩で、エルサレム旧市に入城した。



英軍に降伏直後のガザ

敵領南部占領地軍政部の発足

この後イギリスは、敵領南部占領地軍政部(OETA)を設置し、アレンビー大將を軍政長官に任命した。防衛線は、稜線上エルサレムの北約20キロの地点まで延長され、そこから西の海岸まで地形に沿つて設けられた。つまり、南部占領地は、その防衛線以南の地域ということである。逆に言えば、防衛線以北の地域は、まだトルコ軍が確保していた。ヨーロッパの西部戦線で、1918年にドイツ軍が春季大攻勢を開始したため、遠征軍は兵力をこの方面へさかれ、戦闘を続行できなかつた。パレスチ

ナ北部の解放は、1918年の秋まで待たなければならなかつたが、ユダヤ軍団もその時まで動員されなかつた。

現地入りしたシオニスト連絡会議

バルフォア宣言の発表後、ワイツマンらはイギリス外務省と交渉をかさね、シオニスト連絡会議(通称シオニスト会議 Zionist Commission)を組織した。そしてイギリス側と調整のうえ決まつたのが次の任務である。

1. 英軍政部とパレスチナのユダヤ人社会との連絡
2. パレスチナにおけるユダヤ人住民の救援、追放者の帰還と難民の支援
3. 開拓村の復興並びに開拓村建設のための情報蒐集
4. ユダヤ人社会の組織化
5. 大戦で活動を停止した機関、施設の復活
6. 非ユダヤ人社会との友好的関係の強化
7. ヘブライ大学の建設推進(1918年7月24日に定礎式が行われた)

メンバーは各国政府が任命する形をとり、フランス政府が任命したオリエント学者のシルバン・レヴィ(1863-1935)は、学者としては高名な人物であつたが、反シオニストであつた。その体質は、パリ平和会議で明らかになる。イギリス政府は、前述のウィリアム・ジョージ・オームスビー・ゴアを連絡官につけ、ジェームス・ド・ロスチャイルドがその秘書になつた。パレスチナのユダヤ人社会に貢献したバロン・エドモンドの息子である。主要連合国のユダヤ人社会のなかで、ロシアからは革命と戦乱で参加できず、アメリカはトルコと戦つていなかつたという理由で政府が参加させず、メンバー派遣は1919年になつた。イタリア政府は1918年末に2人のシオニストを任命した。

ワイツマンを団長とする一行8名は、1918年4月に現地入りしたが、シオニスト運動に理解のない軍政部の軍人達の無関心にさらされることになる。